

自主シンポジウム28

テーマ 子どもと保育の危機にどう対応するか？

—保育実践研究の意味と方法—

企画者・司会者	下山田裕彦（大妻女子大学）
話題提供者	佐藤 寛子（お茶の水女子大学附属幼稚園） 堀 智晴（大阪市立大学） 東 義也（尚絅学院大学女子短期大学部） 東 喜代雄（狭山ひかり幼稚園）
指定討論者	榎沢 良彦（淑徳大学）

<企画趣意>

日本保育学会は1999年以来3年余にわたって、「いま、日本の乳幼児及び保育が直面している危機をどう捉え、どう対応するか」を検討課題として共同研究に取り組んできた。そしてその結果を中間報告、最終報告としてまとめて発表している。昨年度は緊急提言集が作成されたところである。その後も少子化の傾向は進み、保育の質は悪化しているといわれる。これでは日本の子どもの健全な成長は望めず、社会の将来は危ぶまれる。

われわれは時下の子どもの姿と保育実践を見直し、子ども理解と保育のありようを根本に立ち返って考えてみたい。まず取り組むべきことは今の子どもの姿と、保育実践をていねいに見直すことであろう。その際重要なことは「子ども理解」であろう。その理解の深さによって実践の深さも決まってくると思われる。

子ども理解とは何か、子ども理解の方法をどうすればよいか、危機を未然に防ぐにはどのような方法があるのか、保育研究と実践の原点に立ち返り、子どもを中心に据えて論議してみたい。

<話題提供①>

関わりをつなぐもの

～子どものからだ・保育者のからだ～

お茶の水女子大学附属幼稚園 佐藤 寛子

関りあいの基盤になるものとして、身近でありながら、最も意識されずにいるものが、からだではないだろうか。目の前に無防備に曝け出されているだけに、かえって見ようとせず、その内にある目には見えない心のみ意識を向けて教育を考えようとする風潮は依然として強いように思う。

する風潮は依然として強いように思う。

幼い子どもたちと日々過ごしていると、当たり前なことなのだが、心と体はつながっているのだと感じることが多い。見えない心を探ろうとするよりも、その子どものからだの表現から、内在する心のあり様を見て取ることの方が、子どもの思いに近づけるような気がする。子どもたちのからだを意識して保育を考えるようになると、自ずと、そこに関わる保育者としての自分のからだのあり様にも意識が向くようになってきた。子どもたちに向けて発した言葉が、なかなか届かずあせる時は、案外こちらに原因があることが多い。(自分本位の時間ややらねばならぬことに縛られていないだろうか…。)子どもとの関係がしっくりいかないとき、自分のからだの動きが妙にぎくしゃくしているのを感じる。(日常の雑多なことに巻き込まれ、自分の呼吸・子どもたちの呼吸に無意識になってはいないだろうか…。)

子どもたちとの暮らしの中での小さな出来事を事例とし、子ども・保育者のからだを視点に、保育の省察が出来れば…と思っている。

<話題提供②>

<この子>理解の重要性

—「気になる子ども」問題を通して—

大阪市立大学 堀 智晴

最近、保育所や幼稚園での研究会で、「気になる子ども」の存在が問題になっている。1歳クラスから5歳クラスまで各クラスに何人もの子どもが「気になる子ども」として報告され、この子どもたちにどう対応したらいいか、参加者が真剣に論議し合うという研究会に出たこともある。確かに今どき子

もは、これまでの子どもとは異なる行動が目につく。友だちと遊ぶことが苦手でトラブル、すぐ手が出る、すぐパニックになる、などである。しかし、私は、保育が思うようにいかないからといって「気になる子ども」と見なすことに問題を感じる。子どもの問題行動ばかりに目がいき、なぜその子がそのような行動に出るのか、その子どもの行動の背景や思いにまで理解がいかない場合も多いのである。

またその一方で、LD、ADHDなど、軽度発達障害の子どもたちの保育・教育が、「特別なニーズのある子ども」の保育・教育として注目されている。これまでの障害児保育の実践の中では見過ごされてきたグレーゾーンの子どもの保育が課題になってきている。確かに発達障害についての理解をした上で子どもを見直す必要があるが、私の経験では発達障害とは言えないケースも少なくない。実践がうまくいかないから「軽度の発達障害」と見てしまうという危険もある。

このような問題を考えるとき、私は、実践研究を通して、目の前の子どもを世界に一人しかいない<この子>としての理解を深める必要があると痛感してきた。今回のシンポではこの<この子>理解の考え方と具体的な理解の方法について提案したい。

<話題提供③>

子どもの悲しみから考える

—遊びの影の側面—

東 義也 (尚絅学院大学女子短期大学部)

子どもの遊びは、楽しさや喜びの追究である。その過程では、思い通りにいかなかったり試行錯誤もするけれども、その先にある願いはやはり自己充実であろう。しかし、それは遊びの一側面であって、もう一つ影の側面のあることを、私は最近知らされた。つまり、遊びにおける悲しみや痛みの表現である。例えば、子どもは自ら負っている課題を遊びにして表現している。ときには、どうしても乗り越えられない現実や限界に直面する。そして、ある種の選択ないし断念がある。しかし、そのような逃れられない否応なしに被る事柄の中でこそ、人間は考え行動する自由を発揮するのではないか。

例えば、子どもたちがある遊びから次の遊びに移ったり、次々に展開するとき、それまでの遊びは止めてしまうということになる。それは、ある意味で

そこで遊んでいる自分を自ら捨てることであろう。もっと言えば、それまでの自分に死ぬということではないか。おとなになるということも同様で、成長の過程における様々な選択や決断は、それまでの自分自身の在り方を葬って、新しい生を生きるということに他ならない。子どもは、そのような小さな死と生のくり返しを、遊びの中ですでに体験し始めているのである。これが私の遊びを巡る子ども理解となった。

従って、子どもたちの遊びにおける悲しみや痛みの表現は、保育者によって正しく受け止められなければならない。悲しみや死ということも含めて、遊びが捉え直される必要があるのである。子どもの遊びを理解するパラダイムの転換が迫られているのかもしれない。当日は、いくつかの事例をあげながら論じてみたい

<話題提供④>

子どもに学ぶ面白さと難しさ

狭山ひかり幼稚園 東 喜代雄

昨年の自主シンポジウム3「いま、なぜ園長のあり方を問うのか？」が頭から離れない。今回は、昨年度の討論を生かしながら幼児理解を考えてみたい。

私の保育経験はまだ34年しかない。この経験から私は「子どもを理解できる」とは思っていない。「全く理解でない」とも思わないが、理解したとしても現場はいつも次の理解を要求する。「理解した」と思ったとたんに大人の思い上がりと思わせられてきた。

論語「為政第二」に「子曰く、其の以てする所を視、其の因る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦さんや。」とある。しかし子ども理解はそう簡単ではない。

それでも子どもに学ぶ気持でいれば、彼らの内面をある程度は覗けるし、よりそうことが出来る。私は竹内敏晴が言う「子どもの言うこととすることで意味のないものは一つもない」をこころに唱えながら、情緒的、直感的に捉えようとしてきた。

実際子どもとともにいることは楽しいし、面白い。反面思うようにいかない悲しみとつらさが同居する。子どもに付き合うことは人生真利に尽きる。この面白さと難しさの中で「実践研究の意味と方法」を事例から探してみたい。